

吉野静

(喜)

シテ 静御前

ワキ 佐藤忠信

狂言 衆徒

所 大和吉野山

「定なき世は中々に。く。憂き事や頼なるらん。

抑これは判官殿の御内に仕へ申す佐藤忠信にて候。

扱も頼朝義経御中不和にならせ給ふにより。判官

殿は此御山を頼み御籠り候所に。衆徒心がはり仕

候により。今夜此山を御開きにて候。さる間某は

此山に残り。防ぎ矢射よとの御事。弓矢取ての面

目と存じ。某一人此山に残りて候。承り候へば。

大講堂に衆会の在る由申し候程に。都道者にまぎ

れ。大講堂に立越え衆徒の詮議を聞かばやと存じ

候。

サシ

「げにやたとへても憂きは変らぬ習とて。其古人は

清見原の。天子の御身なりしかども大伴の皇子に

おそはれて。吉野の宮を出で給ひ。山野に迷ひ給

ふとかや。痛はしや判官も世の讒言の晴れやらぬ。

雲も奥ある吉野山。隠れ家ながら置きかぬる。

御身の果こそ悲しけれ。さるにても我君判官は。

何所の里如何なる所にかおはすらんと。心細くも
そなたの空を。三吉野の霞の内の花の滝。く。
落ち行く方は白浪の。誰に吉野の奥やらん我身の
果は恨めしや。隔てじものを君と我。心一つの二
道を。暫しは頼む迷かな。く。や。これに御
入り候は静御前にて渡り候か。

シテ「御身は忠信にてましますか。

ワキ「さん候防矢仕れとの御事により。某一人留り防矢

射。難なく君をも落し申して候。扱静は何とか
なり給ふべき。返すぐも御いたはしうこそ候へ。

シテ「されば唐土の吉野山に籠る共。遅れじとこそ思ひ
しに。女の身としてはかなくも。捨て残さるゝ三吉
野の。山路に迷ひ里に下りて。今迄かうで候。

ワキ「や。大講堂に当つて貝鐘の音の聞え候。これは推
量仕りて候。我君を追かけ申すべき衆会の貝鐘に
て候べし。きつと物を案じ出したる事の候。御身

は勝手の御前に御参り候ひて。神法楽の舞を御舞ひ候へ。我らは又都道者の体にて。勝手の御前へ参り候はば定めて衆会の面々都の事を尋ね申すべし。終には御中直りの由を申し。兎角時刻をうつし。我君を心静に落し申さうずるにて候。か様に心はめぐらせ共。身は唯独忠信が。思ひ廻らす計りの事。末あらはれば如何ならん。

シテ「思へば涙三吉野の。よし遁れずと君をだに。落し

申さばそれ迄ぞと。

地「思ひ切りつゝ忠信は。く。衆徒の詮議に参らん

と大講堂に出でければ。

シテ「静は其まゝ。

地「勝手の御前に参りけりく。(中人)

ワキ「これは都道者にて候が。か様の衆会の御座敷とも存ぜず候。御免候へ。御兄弟の御事にて候程に。終には御中直りの由申し候。

狂言「シカぐ。」

ワキ「唯十二騎にて御開きと申し候。

狂言「シカぐ。」

ワキ「暫く。十二騎と申せども。かたぐ百騎二百騎にも勝りたる兵達にて候程に中々思し召し留り候へ。かやうに申すは都の者。当山を信じ参る上は。いかに御寺も宿坊も。難なくおはしませかしと。思へばかやうに申すなり。此上は兎も角も。

地「御はからひぞ吉野山。く。よしなき申し事。

洩れ聞えなば判官の。後のとがめもおそろしや御暇申し候はんく。

シテ「さても静は忠信が。其契約を違へじと。舞の装束かきつくろひ。忠信遅しと待ちければ。

ワキ詞「これは都道者にて候が。静の法楽の舞の由承り候ひて。下向道を忘れて候。とても法楽なるべくは。今少し舞を御はやめ候へ。

シテ「何のう都の人と聞けばなつかしや。義経御道せば
き事。世上の聞えいかなるぞ。都人こそ知るべ
れ。」

ワキ詞「終には上は御一体と。聞くより都は先非を悔ひて。
皆々恐れ申すなり。」

シテ「扱はうれしや我君を。くはしく知るか都人。」

ワキ詞「あまりに事延び時うつりぬ。急がせ給へ舞の袖。」

シテ「げにの言葉多き者は品すくなし。かやうに我等

ことはり過ぎば。なか／＼人もあやしめて。もし
もそれとか三吉野の。かつて知らすな。

一声「静に囃せや。静が舞に。」

地「衆徒もいきどほりを忘れけり。」

シテ「神もや納受し給ふらん。」

地「げに此御代の静が舞。」

クリ「それ神は人の敬ふによつて威をまし。人は又神の
加護によれり。」

シテサシ

「然るに彼判官は。神道を重んじ朝家をうやまひ。

地

「頗る忠勤をぬきんでゝ。私のかへりみ更になし。

シテ

「人讒し申すとも。

地

「神は正直のかうべに宿り給ふなれば。静が舞の袂に。暫くうつりおはしまし。義経を守り給へと。

祈るぞ哀なりける。

クセ

「そもく景時が。その讒言の水上を。思へば渡辺や。流るゝ水に満汐の。逆櫓たてんと浮船の。梶

原が申しし事。よも順義にて候はじ。されば義経

は。すぐに治めし三吉野の。神のちかひの真あらば。頼朝も聞しめし直され。義経執節の勅を受け。

洛陽の西南は。これ分国となるべし。さあらば当

山の。衆徒ことぐく参洛し。帰依渴仰の御袖に。

めぐみをいだき給ふべし穴賢。不忠なし給ふな御咎は候はじ。

シテ

「但し衆徒中に。猶いきどほり深うして。

地「進みて追っかけ給ふとも。其名きこゆる人々を。

討ちとゞめ申さんは。片岡増尾鷲の尾。さて忠信
はならびなき。精兵ぞよ人々に。防ぎ矢射られ給
ふなと。語ればげには衆徒中に進む人こそなかり
けれ。賤やしづ。(序の舞)

シテ「賤やしづ。賤の苧環。くり返し。

地「昔を今に。なすよしもがな。大方舞のおもしろ
さに。く。時刻をうつして進まぬもありけり。

又は判官の武勇に恐れてよし義経をばおとし申せ
と。詮議を加ふる衆徒も有りけり。さるほどに時
うつゝて主君も今は忠信が。賢き謀に難なく君を
ば落し申し。心しづかに願成就して。都へとてこ
そ。帰りけれ。